

大阪支部のプロジェクト活動

牧野 満 (奈良ブロック)

プロジェクトの成立

大阪支部では、1985年の大阪大会を目指す中、大会後の支部の在り方について考えられたことが、ブロック・プロジェクト体制でした。全国大会を受けると、支部活動が低調になる、或いは、会を離れていく会員が増えるなどの傾向が他支部では見られていたため、大会以前から先の見通しについて時間をかけて考えられていたようです。当時は支部会員が160名を超え、会員の繋がりを強固なものにしようと先に考えられたのが、ブロック体制でした。

一方、研究の専門性を高めるための役割がプロジェクトでした。榊原氏によると、ブロックがジェネラリストを担い、プロジェクトがスペシャリストを育てるという両輪体制を目論んでいたそうです。プロジェクト体制が取られたのが1981年ですから、4年前からポスト大阪大会を見据え、大会に臨んでいたこととなります。その体制が、何と40年後の現在も続いていることに驚かされます。

プロジェクトから研究の発信

発足当初は、球技、器械、舞踊、水泳、幼年体育、障害児体育（途中で「認識発達」）があり、近年では、健康教育、グループ学習が発足しています。

それぞれのプロジェクトは全国大会でも、基調提案を担い、プロジェクトで練られた実践が全国へと発信されています。提案の数は大阪が一番多く、分科会の運営の中心的な役割も担っています。

今後のプロジェクト研究

振り返ると、プロジェクト活動が隆盛だったのは、同志会の研究テーマが教科内容研究だった1990年代でした。スポーツ文化研究（体育の教材研究）を精力的に進め、新たな教材が開花した時期でした。「フラフト」「混成競技」「丸太投げ」「じゃまじゃまサッカー」「水泳の歴史の追体験」などの教材が生まれ、各教材の可能性を追究した時期でした。新しい実践を創り出すためには、プロジェクト的な教材を深める研究が必要です。文献を読み込み、一つの教材という形に創り上げていくこの過程にこそ、スポーツ文化研究の面白さが備わっています。またこれが会の活性化に繋がります。

残念なことに、現在活動を続けているのは、障害児体育、幼年体育、健康教育の3プロジ

エクトのみです。プロジェクト活動を行う時間的な余裕すらない今の教育現場を物語っています。今は、プロジェクト活動を求めるのは無理かも知れませんが、例えば、支部研究を期間限定でプロジェクト化することも考えられるでしょう。かつて、支部では「競争研究」を進めていました。例会の参加者は少なかったのですが、濃い話が聞ける例会でした。参加するだけで賢くなった気がしたものです。今の時代に合ったやり方で、何らかの形で、プロジェクト活動を復活させたいものです。

